会議録

1 附属機関の名称

犬山市いじめ問題対策連絡協議会

2 開催日時

令和7年2月10日（月） 15時00分から16時15分まで

3 開催場所

市役所 401会議室

4 出席した者の氏名

(1) 委員 林 昭夫、櫻木 茂樹、渋谷 壘、後藤 栄吉、高木 潔
長谷川直哉、黒川 雅幸、水野 幹伸、細野 優子

(2) 事務局 滝 誠、酒井 俊輔、鈴木 早智、黒木 夕子、山田 敦貴

5 議題

- (1) 当市におけるいじめ問題の現状
- (2) いじめの認知件数の推移について
- (3) いじめ問題対策に係る各機関・団体の意見交換

6 傍聴人の数

0人

7 内容

【事務局】

定刻となりました。本日は大変お忙しい中、ご出席をいただきありがとうございます。
ただ今より、令和6年度第2回犬山市いじめ問題対策連絡協議会を開催いたします。
進行は、学校教育課の事務局が務めさせていただきます。よろしくお願ひします。
それでは、はじめに会長よりご挨拶申し上げます。

【会長】

朝会の時に児童に向けて、言葉には力があるという話をしたことがあります。ふわふわ言葉とちくちく言葉があり、子ども達もよく知っているのですが、ふわふわ言葉を言われると元気なる。逆にちくちく言葉を言われると、とても辛い気持ちになって、それをたくさん言われることで苦しいことに繋がってしまう。いじめと言うと殴る、蹴るという身体的暴力、ものを隠される、直接悪口を言われる、陰口をたたかれる、SNSで誹謗中傷を書き込まれるという攻撃があり、それに耐えきれずに自らの命を絶つ子も中にはいるのではないかと考えています。学校ではそのようなことがおこらないように子ども達に指導をする傍ら、日本人の子どもたちは自己肯定感が低いと言われていいますので、その自己肯定感をあげる工夫をする必要があると思っています。なかなか、他人は自分を褒めてくれないので、自分で自分を褒める、自分褒めをすると良いと思っています。すごいことをやらなくても、朝何時に起きようと決めて時間通りに起きたとか、今日は給食を全部食べれたとか、ほんの些細なこ

とでも自分で自分を褒めることが自己肯定感に繋がると思います。逆にやっではいけないことは、何で自分はダメなんだ、他の子と比べてしまって自己否定をし、苦しい状況に繋げることだと思います。昨今、心理的安全性という言葉が出てきましたが、何を話しても否定されることのない空間で活発な話し合いには欠かせないことだと思います。否定されることのない空間であれば、そこに自分の居場所が、心の居場所が見つけれられると思っています。いじめ問題というのは、どれだけ手を打っても多々出てくるものではありますが、後手後手の指導にならなうように、前もって打てる手は打っていくことが教育現場では必要ではないかと感じています。この後、事務局の方から、犬山市のいじめ問題の現状を報告していただきますが、いじめが起きてしまったからどうしようということではなく、いじめが起きないように、事前にどんな手を打っていけるかという観点で話し合っていたらと思っています。本日はよろしくお祈いします。

【事務局】

ありがとうございます。はじめに、本会は「犬山市附属機関等の設置及び運営に関するガイドライン」に基づき、一部公開とさせていただきますが、本日は傍聴人の出席はありません。また、会議録を市ホームページへ掲載することとなります。

それでは、協議に移ります。協議の取り回しにつきましては、会長にお願いしますので、よろしくお祈いします。

【会長】

それでは、今から会議に入らせていただきます。

議事録署名者ですが、校長会副会長と生徒指導担当者代表の2名を指名します。では協議に入ります。

まず、(1)当市におけるいじめ問題の現状について、事務局より報告します。

【事務局】

・ 犬山市のいじめの傾向

犬山市のいじめの現状について報告させていただきます。毎月各学校よりいじめの認知に関して報告をいただいています。いじめの傾向に関しては、様々な要因が見られます。悪口や陰口、暴力、暴言、嫌がらせの件数が多く、近年増加している SNS のトラブル、金銭トラブルも見られました。SNS トラブルについては、写真のやりとりや本人が意図しない所で撮影されたものが加工されて、友達グループで共有される事案があり、簡単には解決できない様子が見られます。また、金銭のトラブルに関しても市内の小中学校でお金を要求する事案が起きています。また、些細な悪口・暴言・嫌がらせに関しては非常に多くの事案の報告が上がっております。このような報告を各校よりいただき、教育委員会でもこの報告を元に、現状の把握、指導の確認をして、学校と協力して進めております。

・ いじめ認知件数との比較・分析

資料の2ページ目をご覧ください。認知件数は推移を見ると令和7年度1月末で42件になっています。昨年令和5年度の1月末の認知件数は44件であったので、比較しても認知件数に大きな差異がない状態になっています。犬山市では積極的な生徒指導、いじめの認知を行っており、早期発見・早期対応を心がけています。基本的な考えとして、学校にはいじめを認知したら3ヶ月の見守り期間をお願いし、文書により指導内容や児童生徒の様子を報告してもらっています。しかし、中には長期的に指導を要する事案も見られ、SNS トラブルの事案では8ヶ月継続して報告をしてもらいました。また、金銭トラブルの事案では、学校の報告に対して、市教委より学校の指導経過や保護者への指導の様子など細かく聞きとりをしている場合もあります。また事案によっては、加害者が孤立をしている様子があると報告があったため、学校において加害者の孤立をどのように防いでいくのか話をし、全ての子どもが安心して生活できる学校作りをお願いし、基本となる3ヶ月の見守り期間をお願いしています。犬山市としていじめの早期発見、早期対策を心がけ、各学校と協力・連携しながら進めています。

【会長】

事務局より報告がありました、犬山市におけるいじめ問題の現状について、それぞれのお立場から、様々なご意見やご質問等がありますでしょうか。

【事務局】

軽微なものも多いのが現状で、下校中のトラブルはすぐに収まるものも多いのですが、SNSトラブルや金銭トラブルは解決までに長い時間を要しています。また、加害者が同じ事案が同時期におきている学校もあり、学級担任・学年主任だけでなく、生徒指導担当、教務主任、教頭が入って、チームで対応・指導してもらっています。

【委員】

報告を受けていじめに該当するかという判断は、管理職に報告して意見をいただいています。被害者の子がいじめと訴えた場合、いじめ事案として成立しますが、シンプルな構図ではない事案の中には見られます。被害者の子にも明らかに非がある場合があり、何をどう取り上げていくのがケースバイケースになっていて、現場では指導が難しいと感じる場合があります。

【会長】

教育現場ではまず事実確認をします。色々な子から聞き取りをして、加害者側には加害者側の言い分があって、被害者も実は何か嫌なことをしているというようなことがあります。そのような時は学校現場でどのように対応していますか。

【委員】

もちろん事実確認や話を聞いたりして進めていくのですが、被害者は自分が被害者っていう意識が強いです。例えば、第三者から見ると、いやそれってどうだろうっていうことがあったとしても、なかなかそこに言及しづらい場合があります。また、加害者にも被害者の側面があったりすることもあります。訴えてきた方だけを被害者として事案成立させるのか、加害者側から訴えが無い場合もおおいので、事案によって対応が難しいと感じることがありました。

【会長】

事案の結末というのは、どのように指導していますか。

【委員】

被害者側が訴えを聞き、その訴えが事実であれば、それでいじめの事案として成り立つと思います。しかし、そこに至るまでに、被害者と加害者の関係に、加害者側も被害者の側面をもっていたりする場合もあるので、どこまで扱って指導していけばいいのかが難しいところです。

【会長】

自分だけ謝るのは、ちょっと違うんじゃないかと思っている児童生徒も中にはいます。自分が指導する時には、「誰々さんのこんな所が良くなかったけど、君にも悪いところはないかな。」と本人のいけない所を客観的に考える時間を設けると、自分の非に目を向け、謝ることもできます。本人が認めてないことに対して、教員が一方的に話をしたり誘導したりすると、加害児童生徒にはなかなか入っていかなくて、話し合いが平行線をたどることが多いのではないかと思います。事件の裏側には両方とも悪いところがあって、両方とも改めなければいけないところがあって、お互いにごめんなさいをすると、小学校段階ではある程度それで収まることも多いです。中学校だとものが壊れたり、お金取られたりとか、体に傷つけられたりするとちょっと話が変わってきます。

【事務局】

各学校からあげられる事例の中にも、やはりそのような内容は多々ありまして、加害者側がしたことに対して、被害者側も相手が嫌がることをやっているということがあります。その時には学校でどのような指導をしたか具体的な内容を報告書に書いていただいたり、両者が面と向き合って謝る機会を設けましたりしています。特にさっき言った金銭トラブルに関しては、被害者側も事の重大さをよく理解していない様子が見られ、被害者側から加害者側に「何かやってよ。お金あげるから」と言っている事案もあります。そのような場合、被害者・加害者という立場が複雑に入れ替わっていることもあり、被害・加害の両方の側面をもっていることもあります。そのような場合、被害を訴えている側にも「あなたは被害者ではあるけれど、言動に気を付けなければいけないだよ」と指導してもらっていますし、指導した後は学校から市教委にも報告してもらっています。

【委員】

金銭トラブルの事案が報告されており、いずれも学校外が発生場所になっています。学校外での金銭トラブルっていうと、学校の問題ではなく、家庭の問題ということになると思うのですが、親の方はどういった対応をしているか教えてください。

【事務局】

学校外の事案にはなりますが、学校外で起きたことが、学校の中の学級や学年内に影響を及ぼす場合には、学校としてもいじめの問題として取り扱うというような姿勢で対応しています。SNSも金銭トラブルですが、学校外での保護者の監督下というところもありますので、学校でも指導しますが、保護者が中心になって指導してもらっています。例えば、金銭トラブルであれば、保護者に連絡して、子ども間での金銭のやりとりが発生している事実を伝え、家庭での対応についても考えていただきます。保護者同士で連絡を取り合っていて、弁償はどうかと、お金の渡すのか、それとも物のやりとりだったので物で返すのか、そういったところは、保護者同士で納得するような形で実は進めてもらっているのが現実です。その橋渡し役として学校が中に入って、仲裁や橋渡しはしませんが、加害者の保護者が、被害者の保護者のご自宅に行っていて、申し上げませんでした、弁償させてくださいという形で対応しているのが実際です。

【会長】

校外のトラブルは親さんに動いていただくことが基本になってくると思います。学校外や家庭で起きたトラブルは、教員が指導することが困難な場合も多く、正直苦しいと感ずることがあります。ただ、家庭同士の話し合いの場所がなく、学校を貸して欲しいという場合もありますので、そういった場合は学校の場所を提供して、保護者同士で話し合いの場をもつということもあります。

【委員】

質問になりますが、いじめの月例報告書のいじめの発生日時と認知日時という欄がありますが、今回の資料をみますと発生日時と認知日時が、ほとんど時間が経過してない事案もある一方で、夏ぐらいに起きたものを、冬に認知するっていった事案も中にはあります。こういった認知が遅くなったケースは、なぜ認知が遅れたか教えていただけたらと思います。

【事務協】

保護者から相談の連絡があり、いじめの認知を行う場合や学校を欠席した際の家庭連絡から聞き取りをしてみると、「少し前に嫌なことがあって」と認知に至る場合があります。また、中学校の事案では、実際には8月頃にあったことですが、1月に全員対象の教育相談を行った際に、相談があり認知に至った事案もあります。教育相談までは特に子どもからの相談はありませんでしたが、教育相談の中の「何か心配なことがありますか」という問いに対して、「そういえば8月頃に部活動で・・・」というような形で相談があったこともあります。

保護者からの連絡だったり、子供からの訴えであったり、教育相談とかの機会を活用したりして、

学校現場ではいじめの認知をし、本人から聞き取りをして、どのような対応をしていくのか、判断しながら進めている状況になっています。いじめの発生日時と認知日時が近いものに関しては、事案が起きてすぐに保護者からの訴えがあったり、欠席理由を聞いた際にいじめの事実が相談されたり、本人からの訴えがあったり、あとは周りの友達からの訴えがあったりしたものになります。事案が発生してすぐに連絡等があると、学校としてもすぐにいじめの認知をして、すぐに指導や行動に移せる事例も多いですが、事案発生から少し時間が経ってからのいじめの認知もあるのが現状です。

【委員】

教育相談については、各学校で実施の期間とか回数というのは決めているということでしょうか？

【事務局】

自分が以前勤務していた小学校では、年に2回、個別で聞き取る時間を設けていました。すべての学校の実施回数を把握しているわけではないので詳細はわかりません。学校では何回ぐらい教育相談を実施されていますか。

【委員】

私の勤務している学校でも年に2回実施しています。

【委員】

時期としてはいつぐらいに実施されていますか。

【委員】

テスト週間に近いところで実施しているので、夏前と秋の2回、実施しています。

【事務局】

以前、自分が勤めていた学校は6月と11月の保護者会の前に実施していました。前期に1回、後期に1回実施している形になっています。

【委員】

いじめの月例報告を見て、中学校の事案で9月ごろが発生認知日時になっている事案があります。大体こういう事案では3ヶ月、いじめがない場合には、解決という形で進めているのですが、これを見ると3ヶ月を過ぎても、報告が継続になっています。これは要するに保護者や本人が納得していないという問題なのか、それともまだいじめが継続しているのか教えてください。

【事務局】

3ヶ月の期間を越えて見守りを続けているのは、加害者への指導も終わり、保護者や本人に納得いただいている形です。ただ、本人の精神的な面が影響し、被害生徒の欠席が継続しており、教育支援センターを利用しているような現状がありました。また、3年生ということもあり、高校入試が控えていたので、学校には継続的に支援していただき、進路が決まるまで継続して報告してもらっていました。中学校としても何もアプローチしないまま過ごしていくわけではなくて、保護者や本人と連絡を取りながら支援を続けていき、進路指導までしっかりつなげて、進学先についても困らないように、相談に乗りながら見守りを継続してもらっています。

【会長】

その他の質問はよかったですでしょうか。それでは、次にいじめ問題対策に係る各機関、団体で意見交換を行いたいと思います。事務局から情報交換の内容の提案をお願いします。

【事務局】

今日ですが2点について、いろいろご意見をいただきたいなというふうに思っています。

1点目は自己有用感と自己肯定感を高め、きずなを感じる集団づくりのあり方です。愛知県の指導生徒指導リーフのNO. 9を印刷してあります。会長が初めの挨拶でも言われたように、学級や学校が安心して子供たちが過ごせる空間であれば、いじめの発生も少なくなるのではないかと思います。実際に自己肯定感や自己有用感が低い子供たちが非常に多く、互いに認められない、自分を認められない、自己肯定感が低い児童生徒が多いのではないかと思います。どの子供も安心して過ごすことができる温かい居場所づくりを目指し、各学校で取り組みを進められていることと思います。資料の生徒指導リーフにもワイワイタイムやスモールトーク、様々な授業づくり、異学年の交流など事例が載っていますが、実際に現場の学校では子どもが認められるような活動をどのように取り組まれているか紹介していただきたいです。それを受けて、専門家の皆さんには感想を話していただいたり、他の市町や学校での事例を紹介していただいたりできればと思っています。

【会長】

ありがとうございました。

事務局より情報交換の提案がありましたので、それぞれの立場から様々なご意見やご助言をいただければ幸いです。どんな点からでも構いません。

【委員】

どれだけ子供のことを理解して、子どもが認められる機会を大切にしているかが重要だと思います。中学校の事例ですが、生徒会活動が非常に盛んで、生徒総会を開催し、その場で学校の課題について子ども自身が自主的な力で解決策を提案したり答弁したりしています。質問に対して、も生徒会の執行部なり委員長なりが、どのように考えているということを、生徒総会の場で発言をしています。このような生徒総会の開催は、子どもたちの自治的な能力を高める場であり、かつ自分たちが認められる機会というものになるのではないかなと感じています。

また、生徒指導リーフのポイント5の地域と共有できる体制づくりの部分ですが、資源回収と地域清掃を中学校としても継続して実施しています。生徒たちの様子を見て回ると、本当に積極的に動いていて、良い活動だなと思います。地域の活動に参加し、そして認められる機会があることが自己肯定感に繋がっていると感じています。

【委員】

私は今、不登校について関わる機会が多いのですが、やっぱり子供を褒めることと、1人の意見を大切にすることが大切であると思います。学校は授業中心になるので、その中で褒めること、1人の意見を大切にされるのがいいかなと思います。褒めるためには、本当に子どもを理解していないと褒めることができないので、褒めること＝生徒理解に繋がるのではないかと思います。簡単なことを言うと、他人の意見をしっかり聞くという態度が普段からできるといいと思いますが、授業を行う先生の方も自分の都合のいい意見だけじゃなくて、そうでない意見も大切にすくい上げながら授業を作っていくことが重要なのではないかと考えています。

【会長】

小学校では帰り会で、いいところ見つけの発表があって、「誰々さんがこんなことをしました」と発表する時間をよく設けます。ただ、この活動はマナーリ化することもあるのですが、人のいいところを見つけようという姿勢を子どもたちがもつことは、人として大事だと思います。

【事務局】

生徒指導連絡協議会に参加している生徒指導の担当として、各学校の自己肯定感を高めるような事例を集約されています。紹介していただければと思います。

【委員】

物事の本質を見極める力や互いの意見や考えを尊重し合う力を身に付けるというねらいの元、中学校の明日を考える会という行事を今年度から取り組んでいます。生徒一人一人が中学校をより良くするために、どんな議題を設けたらいいかっていうのを考えてもらい、それを学級ごとにベスト案を出してもらって、全校アンケートを用いて話し合う議題を2つ決めます。それを各学級で話し合う、その次は縦割り交流学級で話し合う、そして全校で話し合う形で企画して実施しました。授業と学力差がそこまで関係なく、全員同じ土俵で自分の思ったことを伝え合える機会だったので、様子を見てみると本当に多くの子どもが自分の考えや意見を表出させている様子が見えました。全校で実施したのですが、沈黙の場が1回もなく、ずっと誰かが手を挙げて全校の前で発表してらるっていう形でした。出た意見に対して、追加したり、ここはどうなんですかって質問したりとか、議事や運営も生徒が担っていたのですが、このような取り組みは、先ほど言ったねらいの2つの力を伸ばすためにも大事な機会だと思います。結論ありきの議題ではないので、コミュニケーション能力を高めるっていう目的を押さえた上で実施しているので、今後も継続的に行っていけたらなと思っています。あと、自分の学年では行事が終わる度に、周りの生徒に対して、気づいたよいところとかを、カードに書いて送り合う活動をしています。

生徒指導担当として、生徒の心を育てるために行っている各校の取り組みを、各校からアンケートで出していただいています。例えば、市内の中学校でいくと、聞く力を身につける、支え合う力を見つけるピアサポートトレーニングを継続的に行っている学校もあります。その力をつけた上で、ピアトークという仲間の話を肯定的に聞くとか、聞いてもらうっていう活動をやっている学校もあります。あとは、限定的な期間にはなりますが、前向きな言葉を必ず使おうという視点で取組を行い、前向きな言葉をどのように使用したかを必ず毎日振り返ったりとか、ひと月に1回、朝の期間や会議の時間を活用して、アドジャンをしたり、互いの良い所を見つけてスピーチし合ったりと、学校として活動を決めて取り組んでいます。

【会長】

今、学校では、対話的学びということで、文科省の方から言われていて、他の人の意見聞いて、自分の意見と照らし合わせながら力をつけていくことを大切にしています。先ほど話があったように、自分の意見を大勢の前で話せるってというのは自信に繋がっているのではないかと思います。逆に話せないってというのはやっぱり何かしらの自信なさや自己肯定感の低さが現れるのかなというふうに思います。その中で、人の話や自分の言ったことを、周りの子がちゃんと聞いてくれるっていう場が保証されているのが一番大事だと思います。聞いてくれないなど感じると、もう次は話したくない気持ちが生まれることに繋がってしまうのではと思います。そういう子どもが安心できる、聞いてくれるという集団づくりってというのは大事にしていきたいと思っています。

【委員】

警察で取り扱う子どもたちというのは、自分に自信がない子ども達ばかりで、もう一段階程度が大きい子ども達だと思います。なおかつ、自分の意見や考えていることを、言葉で口に出して伝えることが難しい子ばかりというのが、今まで経験の中で感じていることでもあります。自分の考えを言語化して、それを周りに伝えて受け入れてくれる場があれば、いじめに限らず、我々警察の問題になるようなことやいじめに関わることも改善されていくのではないのかというのを感じるところであります。

【委員】

法務局では業務の中で色々なハラスメントの相談を受けることもあります。学校での取り組みや事案を聞きながら、最初会長がおっしゃられた心理的安全性について考えていました。私たちの職場でも心理的安全性を大切にする職場にしようということで、コミュニケーションを図る、意見を否定しない、何でも言い合える、風通しのよい職場にしようということを目標に、みんなで目指して取り組んでいるところです。小学校、子供のうちからこのような取組を進めていただければ、社会出ても職

場の中でコミュニケーションが図られ、その結果として仕事の能率も上がり、またハラスメントも発生しない職場をつくることに繋がるのではないかと思います。

【会長】

小中学校の義務教育は、大人になって社会に出るためのトレーニング段階であると考えていますので、今お話いただいたように子供のうちから、そういうことをトレーニングしていけるといいなと思います。

【委員】

中学校の明日を考える会は聞いていて、すごく良い取り組みだと思ったのですが、実際にどんなテーマが子ども達から出てきたのか教えていただきたいです。

【委員】

今回全校で話す議題となったのか、1つ目が清掃は毎日すべきかどうか、2つ目が自転車通学は選択制にすべきかどうかです。

【委員】

全校は何人くらいで、それぞれ生徒から出てきた考えという捉えでいいでしょうか？

【委員】

全校は約600人で、生徒が自分たちから意見を出して進めてきました。

【委員】

対話できる生徒を育てていくのはすごく大事なことだなと聞いて思いました。私も職業柄からどちらかという、警察さんと同じで、虐待事案とかに関わるケースの方が多かったです。何に困っているかと言うとSOSを出すこと、さっき言語化という言葉がありましたけれども、自分が困っていること、問題だと感じていること、そういうことを言語化して、相手に伝えることだと思います。中学校での取組のよって、自分の考えや意見を言語化していくことは、素晴らしい取組だと思います。

【委員】

資料の中にも出てくる視点と重なってくるのですが、先ほど委員からも褒めるとか、1人の意見を尊重することを授業の中でという話がありました。自分も学校現場にいたときに、こういう実践したら、きっと子どもたちにとっていいだろうと思い、心の栄養になるものを子どもたちに提示するところにどうしても意識が落ちてしまいました。しかし、大事なことはそれが栄養として子どもの中に吸収されていくことで、それを考えたときに、どう授業の中で振り返っていくかということが重要ではないかと思っています。そのため、振り返りの持ち方をもう一度、学校の先生方と一緒に考えたいなと思いました。

何のために振り返りをするのか、授業の中でせつかく先生方が子どもたちを褒めたり、意見を尊重したりするような授業を実践しても、振り返りなく授業が終わっていくと、子どもたちに吸収されないうまま、流れ出てしまうのではないかなと思います。では、どのような振り返りをしたらいいのかということを考えていくと、授業の学びそのものも、教科としての学びそのものももちろん大切なのですが、子どもたちの力を育てていくという上でも、授業の最後にどのような振り返りをしたらいいのか、活動の最後にどのような振り返りをしたらいいのかっていうところを考えていくことがすごく大切な視点なのかなということ、今日お話を伺いながら感じました。

【事務局】

1 回目の会議で中学校の委員からスクリーニングについての話がありました。自分もスクリーニングを学校がどのように活用しているのか調べていくと、生徒指導リーフ No10 にスクリーニングの記載がありました。この生徒指導リーフには、いじめの早期発見早期対応や児童生徒理解には、教師の目とチーム学校としての力が試されると記載がありました。よく読んでいくと、例示されているスクリーニングシートの記載の仕方は非常に細かく、スクリーニング会議の実施についても 1 学級 10 分 × 7 学級で計 70 分くらいであると書いてありました。このような会議を定期的に確保できれば、児童生徒の理解に有益だと思のですが、実際にはこんなに時間をかけることは難しいのが現状です。また、裏面に書いてあります支援の手順ですが、例では学期に 1 回スクリーニング会議やケース会議を実施すると示されています。自分の受けた印象では、学期に 1 回では、申し送りや情報共有が時間的に遅れてしまう印象を受けました。いじめに対する指導や生徒指導は、早期発見、早期対応が何よりも一番だと思っていますので、この例のような会議の開催は非常に大切なのですが、後手後手に回ってしまいそうな印象を受けます。実際の学校現場では、学年内の横の繋がりを活用し、短時間で意見交換や申し送りをを行い、児童生徒の様子や指導内容を共有しています。学校全体での共有になると、その日にあったことを事細かに把握するのは難しいので、このようなスクリーニングシートを活用し、児童生徒の実態を全校で把握できるようにしていければと思います。

生徒指導代表の委員が、1 回目の会議でスクリーニングのことを話題にされて、実際に勤務する中学校で生徒を把握する取組として、提案していただいています。今日はその提案資料を持参していただいていますので、中学校でどのように活用しているのかを紹介していただこうと思います。実際に導入したことによる成果と課題を話していただきながら、専門家の先生方にも聞いていただき、改善点や他の自治体での事例を教えてくださいたいと思います。

【委員】

スクリーニングをすることで、児童生徒理解が深まったり、重大事案の予防に繋がったり、チームで対応することで一人一人の負担が軽減するという考え方は必要ですし、理論的にも大切だということはいくつもわかります。しかし、これ以上、労力も負担感も増え、時間確保も難しいという状況で、同じような取組を実践するのは難しいです。また、この推奨されている一連の動きが学期末等に行われているので、いじめ等の早期発見にそもそもならないし、規模が大きめの学校だとハードルが高いなと感じました。その一方で、規模が大きい学校だからこそ、このスクリーニングの考え方は大切にすべきだと思って、できるだけ負担感を増やさずにやれる方法はないかと考えた結果、こちらの紙にまとめたスクリーニングシートを作成しました。

1 週間ごとにシートが作っており、そのシートに学年ごとに入力する欄が作ってあります。先生方が日常の教育活動で、生徒の様子を見取った結果、気づきがあった生徒の情報や内容をその都度、記入していくというものです。組と番号、氏名、気づき、指導の内容、今後の対応の種別、記入者、生徒指導案件などで報告用紙を提出する必要があるかという項目があり、この情報を入力するという形です。第三者から見てわかりやすい記述になるように内容の欄は自由に記入できるようになっています。種別は全部で 8 種あり、褒めるための材料としても使っていきたくないので、生徒の良いところを広められるとか、生徒の自己肯定感を上げられるような手段にもしたいと願って作りました。毎週水曜日に各学年の生徒指導担当と、教頭先生と養護教諭を合わせて、生徒指導部会を給食の時間に開催しています。その際に、前の週のスクリーニングシートを活用して、シェアすべき内容を確認し、そのシートを各学年で回覧していただくという形で情報共有しています。記載された内容を、先生方が目にしたり話題にしたり、内容を活用して指導したり褒めたりし、そうすることで生徒がよりよく成長することを願っています。それが先生方の個人力とか、チーム力アップにも繋がりと、その結果、中学校がよくならないかと考えました。入力することに対して数分の手間はありますが、その目先の数分が未来の何十分、何時間をなくす可能性もあるので、働き方改革の一環と考えています。この学校で働く先生方が、まだこのシート見てないのと言えるぐらいの文化になればなと思ってやっています。10 月末に提案をさせていただいて、そこから約 3 ヶ月続けていますが、最初は目新しい取組なので、先生方が思ったことや見取ったことを積極的に書いてくださりました。書き込んだ内容を共

有し、生徒のいいところを再発見したり、先生方の指導が繋がっていく様子を実感したりしていましたが、時間が経つにつれて、入力してくれない先生方が少しずつ出てきて、現在は書き込んでくれる人が固定化されてきています。自分は2年生を担当していますが、2年生の先生方は現在でも進んで書いてくださっています。学年の先生だけで集まる時間を確保するのは難しいですが、学年の先生方が生徒の様子や指導の内容を書き込み、それを見れば学年で集まる時間は取れなくても情報共有できている実態があります。教員が変われば、その子どもを見る目も変わり、様々見取りができます。そのおかげで指導がうまくいったり、より精度高く指導できて先生方の自信にも繋がったりしています。このシートの存在は、生徒指導をよい方向に導くことができ、効果があると感じています。希望的観測かもしれませんが、このシートが文化的に根づき、よりよい学校になるだけでなく、生徒の心を成長させたり、己肯定感を上げたりすることに繋がっていくのではないかと感じています。

【会長】

私から質問をお願いします。聞いていいですか。この入力というのは、気付いたときにどんどん入力するというのでしょうかまたシートのアプリはExcelでしょうか。当然、生徒はアクセスできないという認識でいいでしょうか。

【委員】

気付いたときに入力する形です。またシートはExcelでサーバーにしか置けないため、生徒がアクセスすることができません。

【委員】

実践されてみて、現在どれぐらいの書き込みが1日単位か、1週間単位でどれぐらい見られるか教えていただきたいです。

【委員】

現在だと2年生はほぼ毎日、3、4件ぐらい書き込んでいて、他学年はまちまちで週3、4件、記入してある状態です。始まった当初は、書き込み数が非常に多く、シートが長くなってしまい回覧することが大変な状態でした。今は書き込み数が減少している状態です。

【委員】

記入は各先生方にお任せしている感じなのか、先生の方からある程度数について説明したのか教えてください。

【委員】

先生方に提案したときに、どれぐらいの内容まで書けばいいですかと質問があったのですが、ご自身の先生が書くべきだと判断したら書いてくださいと説明しました。それが小さいことでも、もしかしたら共有すべき価値のある情報かもしれないし、それを決めるのも別の人だと思うので、ご自身の判断で、ぜひたくさん書き込んでくださいというふうにお願いしています。

【会長】

書き込み内容は問題点だけではなく、生徒のいい姿を見つけて、こんな姿がよかったということも書いているんですね。

【委員】

実際、書き込みの内容を見ると指導面の書き込みが多いです。生徒を賞賛する部分は数が減ってきていると思います。自分も指導をしたら必ず書き込むようにしています。それが各個人に対しても、学級全体に対しても、授業をしているクラス全体に対しても、伝えた内容や指導の内容を極力書くようにしています。

【事務局】

今、委員より提案された方式で始めているのですが、他の地域で同じようなことをやっている情報や事例を他の委員はお持ちでしょうか。

【委員】

自分は聞いたことないです。このような実践をしている話や学期末にまとめてケース会議をしている話は聞いたことがありません。

【事務局】

専門家の皆さんから見て、件数が減ってきていますが、生徒の把握にはすごく有効な手段だと思っています。今は一部の中学校だけで実施しているのですが、小学校であればある程度時間が夕方に確保でき、学年内の情報を共有しやすいのではないかと思います。中学校は部活動もあり、学級数も多く、授業では先生が入れ替わっていくってことを考えると、関わる先生たちが集まって情報共有する時間や場所を設定するのは難しいと思います。しかし、このシートを活用すれば、指導の内容が一目瞭然でわかるので、すごく有効な手段ではないかと思います。

【委員】

いじめを認知するのに漏れやすいのが3つあります。1つはケンカで片づくやつです。2つ目は、個人が要因になるものです。例えば、本人が発達障害で授業中にどこかに行ってしまうとか、本人が不潔にしている皆から嫌われるとか、知的な遅れがあって他の子から避けられるなど個人の問題があります。それから、もう1つは担任の先生や養護教諭の先生に話すけど、「ここだけにして他には言わないで」「いじめじゃないから大丈夫」というパターンです。後に大きい事件になってから、先生に相談したのかと確認すると相談をしたと本人は話します。でも、当時本人からは「話さないで」と依頼していたことは言わないから、学校が隠していたと疑われるパターンがよくあると思います。このような3つのことについては、たくさん目で見っていくことは、本当に有益で効果があるのではないかと思います。ただ、デメリットで幾つか言われたように、数字で入れるところは評価する人の加減で全然違ってきたり、時間と手間の問題は当然工夫しなければいけなかったり、小学校だったら学級担任が中心で同じ先生ばかり見ることになるし、中学校では一人一人をしっかり見る時間が少なかったりする問題があります。また、資料の保管の面で考えると、個人情報だから開示請求があると見せなくてはいけない資料になるかもしれません。規定を決めて運用をしないといけないと思います。

【委員】

先ほど私は見たことないと言ったのですが、生徒指導の問題を記録して、それを教職員間で共有するという運用の話は聞いたことあるのですが、気づきや賞賛の部分を書き込むというのは多分聞いたことがなかったと思います。

【委員】

結論として、すごく有効だと思います。中学の重大事案の調査をしていたときに、中学校だと担任の先生と教科担任とが異なるため、先生間での情報共有が本当に大事だけれども、本当に難しいのをすごく実感しました。この様式だとエクセル形式だと思いますので、名前検索も簡単にできると思うので、気付いた先生が出来事を見たときに、「この子ちょっと前はどんな様子だったのだろう」と検索して情報を得て、こういうことがあって今この発言や行動をしていると理解できると、声かけや指導の仕方が変わってきたりするのかもしれないと思うので、とてもいい取り組みだと思います。これ自体は学校の先生全部が見ることができるので、保健の先生とか心理士さんが見ることができる利点があります。重大事案に至るような相談は保健室の先生や心理士さんに話していて、担任には話しておらず、情報もってなかったという残念なケースもあったりするので、教員同士で情報をしっかり共有できることが素晴らしいと思いました。心理士さんは守秘義務があるので、その辺の情報共有をどのように扱うのが課題になってくるかなと思います。

【会長】

ただいま、専門的な見地からのご示唆や皆様からいただいたご意見をもとに、さらにいじめ防止ために取り組みさせていただきます。それでは、これで情報交換を終えて事務局に進行をお返しします。

【事務局】

どうもありがとうございました事務局から1点事務連絡をさせていただきます。

本日配付させていただきました要項・資料のうち、資料「いじめ確認・認知に関する報告書」につきましては、この後回収させていただきますので、そちらは机の上に置いてお帰りください。それでは、最後に教育長よりご挨拶申し上げます。

【教育長あいさつ】

—————教育長あいさつ—————

【事務局】

以上で第2回の連絡協議会を閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。